

小・中・高等学校と進むに従い、共同研究の比率は低くなり、個人研究はその逆の傾向をしめしている。共同と個人研究の二本立てか、一本立て

かについては、学校が進むに従い二本立ての比率は高くなり、一本立ては反対に低くなる傾向がみられる。

(6) 研究の中心的分野をどこにおいているか。

(上段人員、下段%)

分 野		小 校			中 校			高 校			
		A	B	C	A	B	C	A	B	C	
ア 学校、学年、学級経営		9	8	6	6	5	5	9	10	7	
		6.4	5.7	4.3	7.7	6.4	6.4	10.6	11.8	8.2	
イ 生徒指導		4	9	5	18	20	19	24	20	26	
		2.9	6.4	3.6	23.1	25.6	24.4	28.2	23.5	30.6	
ウ 教科等の指導		112	106	113	49	48	48	43	40	39	
		80.0	75.7	80.7	62.8	61.5	61.5	50.6	47.1	45.9	
エ 教材、教具の研究		8	8	11	4	3	4	9	14	12	
		5.7	5.7	7.9	5.1	3.8	5.1	10.6	16.5	14.1	
オ 一般的な教養									1	1	
									1.2	1.2	
カ その他	㊶ 特別活動		2	3	2						
			1.4	2.7	1.4						
	㊷ 学級指導		2	3	1						
			1.4	2.1	0.7						
	㊸ 経営組織の活動		2	2	1						
			1.4	1.4	0.7						
	㊹ 教育機器		1	1	1						
			0.7	0.7	0.7						
	㊺ 道徳教育					1	2	2			
						1.3	2.6	2.6			

研究の中心的分野について、比率の高いものをあげると次のようになる。

小学校 ウ
中・高等学校 ウ、イ

小学校においては、「教科等の指導」が80%をしめ、「生徒指導」は3%である。中・高等学校においては、「教科等の指導」が50～60%で、「生徒指導」が20～30%になる。この「教科等の指導」と「生徒指導」の関係をみると、小・中・高等学校と進むにつれ、「教科等の指導」は低くなり、「生徒指導」は反対に高くなる。このことは、現状からみて当然のように思われるが、注釈を要する問題と思われる。

小学校においては、日常生活（生徒指導）を基盤とした教育活動を展開しているので、生徒指導

を軽視しているのではなく、実態に即した教科等の指導方法・技術の研究とみるべきであろう。

高等学校においては、ひとりひとりの個性は握に立った教科等の指導を行なうという、教育本来の姿として、生徒指導をとりあげているものと思う。

学校・学年・学級経営については、小・中学校より高等学校の比率が高い。経営を組織成員の協力活動により、共同の目標を達成させる作用とみると、指導分担が分化されるほど重視されるのは当然と思われるが、小・中学校においてもさらに検討を要することであろう。

その他として、㊶から㊺まで5項目あげられているが、いずれも重要な分野と思われる。